

ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究（3）

——保守系論壇誌における反フェミニズム言説の変遷——

首都大学東京 林原玲洋

1 目的

近年の日本において、最も流布した反フェミニズム言説は、2000年代前半に保守系の媒体を通じて広まったバックラッシュ言説、つまり、「男女共同参画」「ジェンダーフリー」「過激な性教育」バッシングであろう。その内容や担い手については、すでに先行研究が存在する（山口ほか 2012）。本報告の目的は、それら先行研究の知見を踏まえたうえで、近年のバックラッシュ言説を、1990年代以前の反フェミニズム言説と通時的に比較することである。

2 方法

バックラッシュ言説が展開された保守系の媒体はいくつかあるが、本報告では、代表的な保守系論壇誌であった『諸君！』を中心に、反フェミニズム言説の変遷を分析する。

まずは、①〔フェミニズム関連記事に限らず全体として〕どのようなトピックが誌面を構成してきたのか、その推移を確認したうえで、②フェミニズム関連記事（女性の権利や身体をトピックとする記事も含む）が、どのような時期にどの程度の頻度で出現していたのかをあきらかにする。

つぎに、反フェミニズム言説にあたる記事を、年代別に数件ずつとりあげて、③それらの記事が、「敵」であるフェミニズムをどのように位置づけ、書き手と読み手の同一化を図っていたのか、また、④それらの記事に対して、読み手（読者欄への投書）がどのように反応していたのかを、レトリックに着目して分析する。

3 結果

『朝日新聞』に対する批判記事のように、『諸君！』誌上に繰り返し登場するその他のトピックに比較すると、フェミニズム関連記事の出現頻度は相対的に低い。反フェミニズム言説にあたる記事の出現時期も限られており、保守系の書き手にとって、その優先順位は高くないことがうかがえる。この傾向は、近年のバックラッシュ言説に限らず、以前から共通するものである。

その一方で、かつての反フェミニズム言説とバックラッシュ言説には、そのレトリックに特徴的な差異がみられる。かつての反フェミニズム言説は、固有名・具体名によって名指される「敵」について、その主張を批判する、という形式をとっている。一方、近年のバックラッシュ言説は、書き手からみて批判すべき主張を一括りにして、「フェマルキスト」（八木 2001）といった抽象名によって名指される「敵」に帰属する、という形式をとっているのである。

4 結論

かつての『諸君！』は、一口に「保守」といっても多様な執筆陣を擁しており、誌上論争も活発であった。だが、冷戦終結後、「保守」のアイデンティティが再構成される過程で、次第に論壇誌としての幅が失われていくことになる（上丸 2011）。反フェミニズム言説についても、同様の変遷を指摘できるのではないだろうか。「敵」の存在を抽象化するバックラッシュ言説のレトリックは、誰に応答責任があるのかを曖昧にすることで、対話の可能性を閉じる効果を持っていたのである。

〔文献〕

上丸洋一, 2011, 『「諸君！」「正論」の研究——保守言論はどのように変容してきたか』岩波書店。

八木秀次, 2001, 『誰が教育を滅ぼしたか——学校、家族を蝕む怪しき思想』PHP 研究所。

山口智美・斉藤正美・荻上チキ, 2012, 『社会運動の戸惑い——フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』勁草書房。